

対して

① 建春門院の殿上の歌合に、「関路の落葉」といふ題に、頼政卿の歌に、

を出発するとき

② 都にはまだ青葉にて見しかども

長い旅の末に到着すると

だつたことだ

紅葉散り敷く白河の関

③ とよまれ侍りしを、そのたび、この題の歌あまたよみて、
読みになりましたが 時は

この歌を出すかどうか

思い悩ん

作→読者

当日まで思ひわづらひて、俊惠を呼びて見せられければ、

呼ん

で

になつたところ

作→頼政

頼政

④ 「この歌は、かの能因が『秋風ぞ吹く白河の関』といふ歌に似て侍り。 います

俊惠→頼政

⑤ されども、これは出で映えすべき歌なり。
けれども ではない が このように うまく取り扱うこともできるだろう

である

素材を

歌合に

⑥ かの歌ならねど、かくも取りなし
巧みに詠んだ
ほどの出来栄え

あ

ではない

が このように

素材を

出して当然見栄えが良い

である

うまく取り扱うこともできるだろう

いしげによめるとこそ見えたれ。

た

た

詠ん

だ

た

た

た

⑦ 似たりとて難すべき
ている 非難しなければならない
さまに はあらず。」
さまに はあらず。」

と
は
か
ら
ひ
け
れ
ば、

けれ
ば | た
ので

あなた 判断

判断

⑧ 車 さし寄せて乗られける

き、「貴房のはからひを信じて、

歌合に 作 ↓ 賴政

歌合で負けた結果が出た
後責任
負け
いただきましょう
しょ
う
べし。
—

負つて
いただきま
しよう
かけ申す
べし

と
言
ひ
か
け
て、
出
で
ら
れ
に
け
り。
話
し
出
發
に
な
つ
た
そ
う
だ
御
政
↓
俊
惠

言ひかけ
て

作
↓
賴政

⑩ そのたび、思ひの歌合で時思つた通り
ごとく見栄えが
出で映えして勝ちにた
勝つにければ、の

頼政は 帰つ
すぐ に
お礼 を
送つ
た
に、
返事 に、
ける
たり けし
たり けし
よろこび
すなはち
帰りて、

つかはす：丁手紙や贈り物を「やります」

俊惠は見所ありがてしか申したりたしかど、けれど、
俊惠→頼政 そのように

副詞

俊惠→賴政

の結果を
聞いて いなかつた うち
は、あいなく むやみに
こそ が
が
まし た
に、 が

連用形の副詞的用法

俊惠→賴政

(12) 勝つて
非常に高い
手柄を
得た
たり
と
なん、心の中
だけ
はで
自然と思い
まし
おぼえ
侍り
た
し。
いみじき
高名
し
たり
と
なん、心
ばかり
は

俊惠→賴政

とぞ、俊恵は語りて侍りし。
語つ
いまし
た。

作
↓
讀者